

橫

笛

草

紙

横笛草紙

中ごろの事にや、建禮門院の御時、刈藻かりも横笛よこふえとて、二人の女房侍りけり。刈藻は平家のとき、越前の前司もりつぐと最愛して下り給へり。今一人の横笛が行くへを尋ぬるに、まことにあはれなる事どもなり。そのかたち、容顔美麗にしていつくしく、霞に匂ふ春の花、風にみだるゝ青柳のいとたをやかに、秋の月に異ならず。彼の頃都に聞え給ひし淨海入道どのにうへこす人ぞなかりける。津の國兵庫に都を立て、後の世までのかたみと思召し、築島をぞつかれたる、殊に末代まで絶えおとかや。其御子小松殿の御うち、三條の齋藤、瀧口時頼たきぐちときよりとて、花やかなる男子おのこあり。小松殿の御つかひに女院の御所へ参りつゝ、からがきの内へ入り、面廊めんらうにやすらひ、物申さんと窺ひたる所に、横笛櫻重ねの薄衣に紅の袴のそばをとり、身を押しのけて出でたる形、をんけんとして楊貴妃李夫人も、是にはいかで優るべきとぞ覺えける。さて瀧口文とり出だし、とく御返事御申しさふら

からがき―唐垣
面廊―座敷へ行
く所の廊下

へとて、やがて懸想詞をぞかけにける。

秋の田のかりそめぶしのみなりとも君が枕を見るよしもがな

横笛顔うちあかめてぞ受取り参らせける、御返事をばよの人してぞ出だしける。瀧口御所よりかへりて、心そらにあこがれて、寝もせず、起きもせず、いづれをか夢とも思ひ分けたるかたもなし。いかにと問へども言はずして、只寄り臥して見えければ、ある時乳母枕にそひ給ひ、御心のやうを懇に御物語候へ、つやくさやうに只ならぬ御煩ひと見まゐらせてさふらふ、御心を残さず御物語さふらへと申しければ、瀧口打ちとけのたまふは、いつぞや女院にようゐんの御所へ御使に参り候ひし時、横笛とやらを一目みしより、かた時も忘るゝひまもなく、つゝむ思ひはうづみ火の、けふりは胸にせきあへず、いとど思ひはます鏡、かき曇りたるばかりなりと、懇に語りければ、その御事にてさふらはど、やすき御事にて候ふぞ、御文あそばし候へ、女院の御所へ常々みづからこそ参り候へ、御機嫌よき時に申さんとて、世にたのもしく申し侍りければ、瀧口あまりの嬉しさに、急ぎ起きあひ、紅くれなゐの短冊櫻たみつけたるを引き重ね、墨すりながし筆をそめ、心のうちを書きつけ、ひき結びてぞ出だしける。めのと文給はりて、女院の御所へぞ参りける。瀧口

たみつけたる—
彩色したる

が心のうち譬へんかたぞ無かりける。めのと横笛にあひて、しばしは何となき物語などして、泉殿いづみのみの立石たていしの陰かげにて、おもしろき文をひろひ侍りしが、御身はいまだ若くましませども、源氏、狭衣、古今、萬葉、伊勢物語などあそばし給へば、言ことの葉はの品をば知らせ給ふべし、あそばしわけて御聞せさふらへと言ひければ、横笛わがみの上とは知らずして、文こまふと見給へば、筆のたてやうなど、由ある御文と見え侍りける。歌を見給へば、身はうき雲のごとくなり、梅の立枝たちえの鶯は、岸うつ波のふぜいして、野中の清水、谷のうもれ木と書きとどめ、

人はいさ思ひもよらじ我戀のしたにこがれて燃ゆる心も

君ゆゑに流す涙の露ほどもわれを思はゞ嬉しからまし

横笛申しけるは、葛の下葉とは、われ爰にありながら、千々ち々に心のかよふ事なり、身はうき雲のやうぞとは、天あまのよそなる君故に、心は空にあこがると事なり、梅の立枝の鶯は、聲ふりたてて鳴くばかりの事なり、岸うつ波のふぜいとは、心を碎くらん、野中の清水とは、人に問はれずひとりすむ事なり、埋火とは、こがれて物思ふの心なりとぞ語り給ひける。めのと此由聞き給ひて申しけるは、今は何をか隠し参らせん、横笛殿へ此

ふみたがへし路
みに文をかく

文参りて候ふぞや、御返事とりて得させよと申す人の候ふなり、されば人間の習ひは、一樹のかけ一河のながれを汲む事も、他生の縁と申すなり、ひと村雨のあまやどり、いづれもこの世ならぬ縁とこそ聞き傳へ候へ、いづぞや小松殿の御使に参り給ひし瀧口殿の、君を一目見参らせ候ふより、御面影の忘れがたくて、遂に息の通ふばかりにて候へば、人をば人こそ助けさふらへ、されば小野の小町は、人の思ひのすゑとほり、後には浅ましき身となりたる由うけ給はる、殊更わりなきは此戀の道とこそ申し侍れ、中川の逢瀬はしらせ給はずとも、一筆はやすき御事なれば、御返事あそばし給へかしと、こまごまと申し侍りければ、横笛思ひよらずとて、みやまぎのふみたがへたるにやとて、埋火の下にこがると聞くからに消えなん後ぞさびしからまし

とあそばし、引き結びて、よに恥しけに出だしたる有様、誠にうつくしき何にたとへん方もなし。殿の戀ひけるもことわりとこそ思ひけれ。

御返事取りて歸りけり。さて瀧口今やくと胸打ちさわぎ待ち給ふ心の中ぞ哀なる。さる程に乳母めのとひそかに立ちより、かの文取り出だして奉る。瀧口是を見て、うれしさは何に譬へんかたかなし。その後たび／＼文どもありて、あふせの中となり給ふ。小笹なざさのな

おくり候へ誤
謬あるべし意味
通ぜず

けんねん一念の妄念
なり、五生の間
想報を受く況や
思念繋着する時
は無量の長時に
互りて其報を受

かの一節ひとせふしも契りそむれば、ある時は里へ出で、忍びて通ふ時もあり。又風の心ちといひ
なして、忍びくにに通はれける。比翼連理の契をこめ、ことかりそのとは思へども、年ねんらい來
年月としつきかさなりける。さる程に父のもちより此事を聞きて、瀧口を召してのたまふやう、汝
をばいかなる人の聲にもなし、互にたよりとも成るならば、見る目も心やすかるべきに、
世になし者にあひなれ、身をいたづらになす事こそ口惜しけれ、やがておくり候へと、た
びたび教訓しけれども、用ひす通ひ給へれば、重ねて申されけるやうは、さのみ聞かれ
給はずば、恨み申すべしとて、不興ふきようの使ありければ、瀧口此由聞くよりも、つくぐ物を
案するに、此世ばかりの夢ぞかし、かゝる思ひをする事よ、東方朔が九千歳、西王母が一
萬歳も、名のみ残りて跡もなし、浮世を物にたとふれば、岸の額の根なし草、入江の水
に捨小舟、波にひかれて行くへなく、花のうへなる露よりも、あやふき人間の知らです
むこそ拙けれ、大梵王だいぼんわうの樂みも、思へば夢のうちぞかし、か程かりなるあだし世に、思
ふ人になぐさみてこそ、思ひ出でとは成るべけれ、又いかに榮ふるとも、思はぬものはいか
にせん、親の命を背かんと罪深かるべし、女の心をやぶれば、一念五百生けんねん無量
劫ごふの罪たるべし、是を菩提の心と思ひつゝ、殊更その夜は靜に横笛に打ちむかひ、いつ

へいしやう一平
生か
そふえてーそび
えての衍か

よりも睦じけなる風情にて、名残をしはいかばかり。いたはしや横笛が、われが思ひ立つ事を、露ほども知るならば、いかに悲むべき物と、横笛が心のうち思ひそめつる始めより、こよひの今に至るまで、思ひつゞけてよもすがら、包むとすれど涙川、袖のしがらみ堰きかねて、千夜を一ちよ夜とちぎる身の、たれにとてかは、鶏にきとりの夜深きに音ねをば鳴きぬらん、へいしやうのやもめ鳥のうかれ聲、耳にそふゑて、夜もほのくくと明けければ、何となく出で立ちて、笛をばとり忘れたる風情にて、枕に置きて出でけるが、又立ち歸り一目見て、又よといひし言の葉は、何となくいひしかど、それが限の言葉なり。其後横笛けふも過ぎ明日あすも空しく待ちかねて、暮るれば門かきに立ち出でて、ふけゆく月ももろとにも、只ただすゞごとくとひとりゐるの、うらみの數ぞつもりける。扱も瀧口墨染に身をかへて、年はつもりて十九と申すに、嵯峨の奥に聞えたる、往生院と申すに閉ぢこもり、行ひすましてゐたりけり。瀧口が心のうち褒めぬ人こそなかりける。たま／＼言こととふ物とては、嶺みねに木づたふ猿さるのこゑ、松の嵐、後枕にきけば鹿かのこゑ、夜寒に弱る蟲の音も、笈の水の絶え／＼に、かけても習はぬ煙にそめなし、うき世の事を觀じつゝ、いと哀ぞ増りける。

何とたゞ寛の水の絶え／＼におとづれきては袖ぬらすらん

と口ずさみて、よるひるの勤ひまなくこそ聞えける。さても横笛がかよる事をば夢にも知らず、空しき夜半のひとり寝も、思ひそめし初めより、野の末、山の奥、千尋の底に至るまで、かはらじとこそ契りしに、我ならず、いかなる人にあひ馴れて、いつしかさみ給ふらん、うらめしやとて思ひしづみし所に、爰に人の申すやう、ちかき頃物の哀をとどめしは、三條齋藤左衛門の子息瀧口殿こそ、親の不興をかうぶりて遁世しけるが、行方しらずと言ひければ、此由横笛聞きつけて、あな浅ましや、是は夢かやうつよかと、委しくこれを尋ぬるに、嵯峨の奥とやらんにおはしますと言ひければ、浅ましや、みづからがそれをば夢にも知らずして、恨み申すぞ悲しけれ、かくとだにも知りたらば、野のすゑ、山の奥なりとも、おなじ道に入るならば、蓮の縁となりて、さこそは嬉しからましと、天にあこがれ地にふし給ひしその風情、譬へんかたも無かりけり、餘りのおもひに堪へかねて、むざんや横笛、御所を忍び出で給ひ、あこがれ行く程に、乾のかたと聞くなれば、内野に迷ひ出でて、南を遙にながむれば、内裏のあととおほしくて、羅城門は荒れはてて、礎ばかりぞ残りける。又鳥羽院の西へ行き、春夏過ぎて秋の山、むらだ

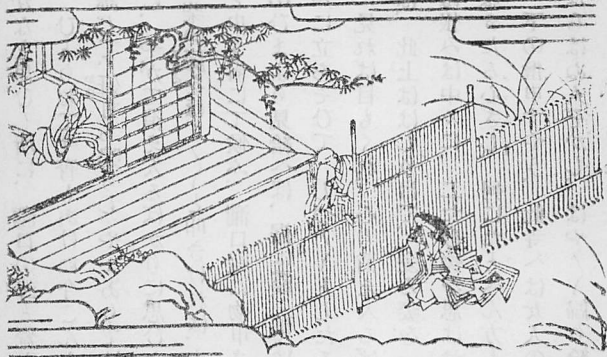
春を忘れぬ梅の花
道真「吹く風に匂ひあこせ
上梅の花あるじ
なし」とて春を忘
るなし
三さうまん！未
詳
（戸無瀬）の衍か
ぎんの聲一響の
聲の衍か

たどろ／＼と一
衍か
わどり
との

つ松に吹く風も心細くぞ覺えける。北を遙にながむれば、春を忘れぬ梅の花、あるじ忘れぬ匂にて、思ひやられて玉鉢の、道さだかに見えねども、ならびの里にかよりつよ、染殿の后御山莊ほうゑ院をさし過ぎて、つり殿三さうまんの嵐の、おのづからぎんの聲をしらべ、谷の水音すさまじく、とくせの瀧のながれも、筏をくだす大井川、るぜきの水を詠めつよ、かき集めたる藻鹽草、やるかたなきの餘りに、かくぞ詠じける。

せきあへぬ涙の川の早き瀬にあふより外のしがらみぞなき

といふ古歌を思ひ出でられける。たどろ／＼と行く程に、嵯峨の道をば知らずして北山に迷ひける。所々に立つけぶり、する消えはてて跡もなし。行きかふ人は絶えはてて、人を咎むる里の犬、聲澄む程に成りしかば、やう／＼迷ひ行く程に、法輪寺の橋うち渡り、其夜は虚空藏に参り通夜を申して、夜もすがら申すやうこそ哀なり。ねがはくは御佛納受まし／＼て、夫婦の道をかなしみて、野にふし山に住むまでも、翼をかさね、契をなすとかや承り候へば、衆生を助けましますば、飽かで別れし瀧口を、一目みせてたび給へと涙をながし、夜もすがら少しまどろむ所に、八十ばかりの老僧、墨染の衣に香の袈裟をかけさせ給ひしが、横笛が伏したる枕にたちより、北の方往生院にさふらへど、



今生の對面は思ひもよらぬ事と、懇ろにのたま
 ひ、かき消すやうに失せたまふ。夢打ちさめて
 横笛は、涙をながし申すやう もとよりも叶は
 ぬ事は是非もなし、さりながら叶はぬ事を叶へ
 させ給ふこそ、神や佛の誓なりと、泣くより外の
 事はなし。今ははや頼みもつきし事なれど、夜
 もほのくくと明けければ、虚空藏をふし拜み、た
 どりたどりと行くほどに、道行く人にあひ給ひ、
 往生院とやらんはいづくの方かたと問ひければ、是
 より乾のかたに見えて、住みあらしたる寺あり、
 草はづ茫々と露ふかしく、こまやかにこそ教へけれ。
 往生院と聞くからに、さきへとばかり急ぎけり。
 やうく尋ね行く程に、教へのごとく、住みあ
 らしたる寺あり。あたりをめぐりやすらひ、便たより

もがなと思ひし所に、瀧口の聲と覺しくて、かくこそ詠じ給ひける。

ひとりねて今宵もあけぬ今こんとたのまばこそは待ちもうらみん

と詠じて、鉦^{かね}打ち鳴らし、やゝありて法華經の提婆品^{たいはほん}を高聲^{かうしやう}に讀み給へば、瀧口と聞くからに、やがて消え入るばかりに思ひしかど、しばし心をとりなほし、よろ／＼と歩みより、柴の扉^{さへ}をほと／＼と叩きければ、内より下の僧^{しゆ}をいだし、いづくよりと問ひければ、横笛と申す者にて候ふ、瀧口殿に物申さんと申す。横笛と聞くよりも、胸打ちさわぎ、障子のひまより見給へば、裾は露、袖は涙にしをれつゝ、誠に尋ねわびたると打見えて、柴の戸に立ちそひて、しづ／＼としたる有様なり。いにしへの有様になほ勝りてぞ覺えける。見れば目もくれ、心も消え入るばかりなり。いづれを夢とも思ひわかず、又思ふやうは、此上ははしり出で、變る姿を一目みせばやとは思へども、心に心を引きとどめ、逢はぬ恨みは中々に、二たび物を思はせん、むざんや、横笛が三年^{みっせ}ばかりの情を忍びて、尋ねきたる心ざし、何にたとへん方もなく、袂を顔におしあてて、泣くより外の事ぞなき。下の僧申すやう、此寺へは女人のまるらぬ所なり、そのうへ瀧口とやらんは、聞きもならはぬ人ぞかし、はや／＼歸り給へとて、柴の編戸^{あみど}をおし立てて、其後音もせざり

神鳴も思ふ中云
云一古今「天の
原ふみとどろか
し鳴る神も思ふ
中をばさくるも
のかは」

けり。横笛是を見給ひて、情なの有様や、昔にかはらで今も契らんといはどこそ、變りし姿只一目みせさせ給へと、時雨しぐれにぬれぬ松だにも、又色かはる事もあり、火の中水の底までも變らじところ思ひしに、早くも變る心かな、ありし情をかけよと言はどこそ、みづからも共に様をかへ、おなじ庵室にすまひして、御身は花を摘むならば、みづからは水をむすび、一蓮ひそつはちすの縁とならばやと思ひ、是まで尋ねてまゐり、夫妻は二世の契と聞きしかど、今生の對面だに叶ふまじきか、あさましや、親の不興をかうぶりて、かやうにならせ給へば、みづからを深く恨みさせ給ふもことわりなり、思へば又みづからは、御身ゆゑに深き思ひにしづみ、たがひに思ひ深かるべしと、涙をながし申すやう、さてもいにしへは雲をうごかす神鳴も、思ふ中をばよもさけじと、契りつる言の葉は、今のごとくに忘れず、睦言むつごの袖のうつり香は、今もかはらず匂へども、いつのまにかは變りはて、うたての瀧口やとて、聲もをします泣きければ、瀧口是を見て、あまり歎くもいたはし、せめては聲なりとも聞かせばやと、思ひてかくなん、あづさ弓そるをうらみと思ふなよまことの道に入るぞうれしきとありければ、瀧口が聲と聞くよりも、あまりの嬉しさに、横笛とりあへず、

梓弓そるを何しにうらむべき引きとどむべき道にあらねばと、泣く／＼打ちながめ、悶えこがれて泣きゐたり。

今は頼みも盡きはてて、かくてこゝに在るべき身ならねば、泣く／＼迷ひ行くほどに、又立ちかへり恨しけに見て、扱も瀧口なさけなく、みづからを何になれとて、かほどに捨てはてけるぞと、うたてやと思へば、いとどあとへひく心地して、いそぐ心はさゝがにの、絲より細きわが身かな、蛸めしひの貝の片思ひ、人はかほどにつれなきを思ふも苦し、とにかくにつれなき命あればこそ、飽かぬ別れも戀しけれど、只一すぢに思ひきり、大井川の汀みぎはなる岩間づたひの細路を三町ばかり行きすぎて、千鳥が淵といふ所に、うへなる衣きぬを木の枝にかけ、踏み馴らしたる草履ぞうりをば岩の上にぬぎすてて、嵐の山のおと、友よぶ千鳥横笛が、いまを最後の泣く聲は、いづれともなき哀かな。むざんや、横笛西にむかひて手をあはせ、南無西方彌陀如來、あかで別れし瀧口と、同じ臺うてなに迎へさせ給へと、是を最期の詞にて、終に身をこそ投げにける。惜しかるべきよはひかな、年十七と申すに、終に空しくなりにけり。かゝりける所に、つま木とる山人、川向ひにてあれよくとよばはれど、程遠ければ終にはかなくなりけり。かくて山人は、瀧口の庵室の前を

とほるとて、友人にかたるやう、近頃あはれなる事をこそ只今みて候へ、大井川へ十七八の女房の身を投げ給へるを、あれよくと言ひつれど、川よりこなたを通る事なれば、あはれさ申すばかりなしと、こまふと語りければ、友人是をきよ、あはれなる事かと、泪をながし通りける。瀧口是をきよつけて、胸うちさわぎ、もし横笛なるらんと、取る物も取りあへず、本尊首にかけ、しもの僧一人めしぐして、身の憂きかずは大井川、涙のみちはかき暮れて、いそぐとすれど程遠く、泣くくはしり行くほどに、法輪寺の橋になりしかば、峯の梢に薄衣うすぎぬかゝり、嵐にひらめけば、われを招ぐかと、おのづからいとどあはれぞ勝まさりつゝ、やうく大井川につき、かなたこなたと尋ぬるに、川の末に流れとまりてありつるが、昔のかたちは失せはてて、空しき死骸をとりいだし、泣くよりほかの事はなし。さても今朝往生院にて、柴の編戸をへだてつゝ、此人は外、われは内にて、悶もだえこがれしありさまを、今の姿にくらぶれば、物のかすにてかすならず。あだなるも、つれなきも命、うきに限らぬならひかや。いかなる過去の因果にて、かゝる思ひをするやらん。瀧口あまりの悲しさに、膝のうへにかきのせて、無慚むざんのもの有様や、かくあるべしと知りたらば、などかは見もし、見えざらん、さこそは草の陰にて恨めし

とおほすらん、よし恨みとも思ふなよ、わづかの夢の世に、たれか永^{なが}らへはつべきぞ、ことさら中にも若きが先立つあはれさよ、又かやうにならせ給ふも、此世ならぬ因果ぞとおほしめし、今こそうらみの淵に沈むとも、わが命のあらんかぎりは、後世をばとぶらひ申すべし、さらぬだに女人は五障三しよにえらばれて、罪ふかし、かたぶく日は中^{なか}空^{ちゆう}にかへる事なし、人はさらに死して再びかへらず、さぞ苦みの思ひやられていたはしや、さてもいにしへの姿はつきはてて、軒をてらざる夕顔の花の色こそ悲しけれ。

軒をてらざる
軒を照らさる
の意

かくてあるべきにあらざれば、程近き鳥部野^{へん}の邊にて、ゆふべの煙となしはてて、骨^{こつ}をばひろひ、もとの庵室^{いんしつ}にかへり、いよく道心^{みちこころ}おこしつゝ、なほくとぶらひ給ひけり。さるほどに都に此事かくれなし、小松殿も女院^{によういん}も、あはれと思しめし、やさしき者のふるまひや、人の契をなすならば、かやうにこそあるべけれとて、女院を初めまゐらせ、聞く人々も袖をしほらぬものは無し。小松殿の御大臣^{おんおとぎ}、御所へ仰せられけるやうは、瀧口を召しいだし、いかなる寺をも御造り候て、御とらせ候へとありければ、瀧口きよて、都近く住めばこそ、かやうの事をば聞き給へ、仰せなきその先^{さき}にとて、横笛がためにとて、高野山に上りつゝ案じすましてゐたりけり。